

「信長が生まれたまち」への期待

千田先生の

お城探訪



織田信長は1534(天文

3)年に現在の愛知県稲沢市・愛西市にある勝幡城で生まれた。勝幡城は江戸時代に尾張藩が行った人工河川・日光川の開削によって、本丸中央が流路となって破壊された。しかし、まだ日光川の両岸に本丸は残っている上に、本丸周囲の帯郭や、城下の武家屋敷と町を囲んだ堀・惣構えも地下に残っている。

勝幡城

愛知県も稲沢市も愛西市も、勝幡城の発掘を一度も行ってないが、愛知県が武將観光を推進し、地元自治体が「信長が生まれたまち」をアピールするなら、してほしいことがある。勝幡城を発掘調査して、残っている城跡を史跡として整備することである。完成すれば全国から信長ファンが集まる特別な場所になる。関係自治体に期待したい。

はじめ、夜になって5艘の光り輝く巻藁船が天王川にこぎ出す宵祭のみやびさは、たとえようもない。私も昨年拝見して、夢のような時間をすごした。そして夜を徹して船の提灯を取り外し、能装束をまとった人形を戴いた「車楽舟」に改めて、再び天王川に船が勢揃いする朝祭は、華麗そのもの。この豪華な祭礼は、津島商人の経済力の象徴である。

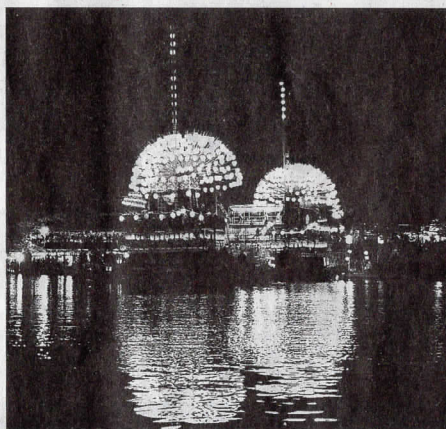
メートルに、中世の尾張で栄えた商業都市・津島があった。津島は津島神社の古くからの門前町であり、天王川を通じて伊勢湾につづく湊町だった。勝幡城と津島は今も河川改修でなくなった「古日光川」で結ばれていて、川沿いの堤防上の道でも行き来できた。1526(大永6)年に津島を訪ねた連歌師宗長は、堤が街道になっていて、天王川に津島神社と町とを結んだ長い橋が架かっていたのを見ている(『宗長手記』)。

1558(永禄元)年の天王祭を、信長は天王川の橋の上から、「女房達」は棧敷から見物したという。信長にとって、津島の天王祭は、子供の頃から親しんだ懐かしい祭りだったに違いない。津島の人びとと信長との絆は深かった。1582(天正10)年に本能寺の変で信長が死ぬと、津島の人びとは信長を悼んで、飾りのない船でこの年の天王祭を執り行った。

2024年の天王祭は7月27、28日に開催予定と聞く。信長の面影を追って、美しい祭礼を体感してみたい。

津島神社は、現在は7月に行う尾張津島天王祭が有名である。夕方から提灯の点灯を

(千田嘉博・城郭考古学者)



尾張津島天王祭の宵祭で、提灯を灯(とも)して進む巻藁船＝筆者撮影

登記法制定以前から存在

宇和島市に3軒